

〈目次〉

病院長就任インタビュー
東日本大震災被災地への医療支援派遣報告

【診療科・部門紹介】

》 心臓血管外科

》 脳神経外科

● 錦江湾魚ごよみ

● **病院再開発** 駐車場の整備について

理念

鹿児島大学病院は、21世紀に輝くヒューマン・トータルケア病院の構築を目指し、医療人の育成及び医学・歯学の研究の充実と発展に貢献すると共に、常に患者さん本位の原点に立った、質の高い医療を提供します。

基本方針

1. 患者さんの権利を尊重し、安心して安全な納得のいく治療を心がけます。
2. 質の高い医療、先進的医療の充実を図り、地域の中核的医療機関として貢献します。
3. 教育・研修病院として、地域の医療機関との連携を図り、人間性豊かな使命感にあふれる医療人を育成します。
4. 診療を通じてわが国の医学・歯学の研究を推進し、医学・歯学及び医療の国際貢献を目指します。
5. 安全で効率の高い病院運営体制を確立します。

患者さんの権利と責務

〈患者さんの権利〉

1. 誰でも良質な医療を公平に受ける権利があります。
2. 人の尊厳は、医療行為のあらゆる場面において尊重されます。
3. 医学的な状態、診断、処置その他の個人情報保護されます。
4. 治療・検査の方法、薬の内容等について十分な情報と説明を受け、理解した後、同意・拒否を選択する権利があります。
5. 診療録等に記録された自己の診療内容について、本院の規則により、情報の提供を受ける権利があります。

〈患者さんの責務〉

1. 医療従事者が最善かつ適切な診療を行うために、自身の健康状態に関する情報をできるだけ正確に伝える責務があります。
2. すべての患者さんが適切な医療を受けられるようにするために、院内の医療の妨げとならないように協力する責務があります。

県内唯一の特定機能病院として 安心・安全な高度先進医療を 提供していきます

鹿児島大学病院
熊本 一郎 病院長

— 現在、鹿児島大学病院では「病院再開発」のための工事が着々と進んでいます。工事の進捗状況、今後の予定などについて教えてください。

病院長 平成19年、病院施設を10年以上かけてリニューアルする「病院再開発計画」がスタートしました。平成21年6月には新中央診療棟が完成し、平成23年からは新病棟建築も始まりました。完成は平成25年3月を予定しています。新病棟が完成すれば、患者さんの療養生活はより快適なものになります。また、耐震・免震設備を備え、災害に強い大学病院となります。屋上にはドクターヘリの離着陸が可能なヘリポートを備え、8階には研修医のための総合臨床研修センターも開設します。

外来棟や病棟の改修など工事は今後も続きます。工事車両が病院敷地内を頻繁に行き交うため、患者さんにご迷惑をおかけすることもあるかもしれませんが、工事によって病院の機能を止めることがないよう、工夫しながら着実に再開発を進めていきたいと考えています。

— そのほか、大学病院が力を入れていることはありますか？

病院長 平成23年4月には鹿児島県と鹿大病院が連携し、県内の医師不足や医師偏在を解消することを目的として寄附講座「地域医療支援システム学講座」を設置しました。大学病院内の「地域医療支援センター」が医師派遣のための相談窓口となって活動するほか、鹿児島県地域医療再生計画に基づいた「地域医療フェニックスプラン」を策定していく予定です。

また、平成25年3月までを目処に「救命救急センター」の稼働を目指しています。今年5月には担当の教授も決まりました。救命救急に対する地域の要請が大きいことはもちろんですが、医療人教育の場として、救命救急部門の充実は欠かせないものだと考えています。

— 患者さんの利便性を高めるための工夫がありましたら教えてください。

病院長 少しでも多くの方々に安心して安全な高度先進医療を提供できるよう、近年、大学病院では患者さんの在院日数を減らすためのさまざまな努力をしています。また、昨年から全診療科で予約制も取り入れました。再診の患者さんだけでなく、新規の患者さんも予約制にしたことで、外来の待ち時間が短縮されるという良い効果もありました。これにより、病院職員が仕事の予定を立てやすくなり、効率良く働くことができるようになりました。

— 最後に、病院長就任の抱負と、地域の方々や患者さんへのメッセージをお願いします。

病院長 鹿児島大学病院は鹿児島県内唯一の特定機能病院*として、高度で先進的な医療を提供してまいります。もちろん、その医療は安心・安全なものでなければなりません。安心・安全な医療を実現するために病院職員の研修の機会もさらに増やしていきたいと考えています。また、大学病院という性格上、医師をはじめ、看護師、薬剤師などの医療人を養成する役割も担っていきます。

*特定機能病院……高度先進医療行為を必要とする患者に対応する病院として厚生労働省から承認をうけた病院のこと。

東日本大震災被災地への医療支援派遣報告

鹿児島大学病院では3月から4月にかけて、東日本大震災被災地の宮城県に医療支援チームを派遣してきました。石巻赤十字病院を拠点に、避難所における住民の診療・健康相談活動などを現地の医師・看護師と連携して行ってきました。

今回の医療支援で派遣された鹿児島大学病院職員3名の活動報告と、5月24日に開催された「医療支援派遣活動報告会」の様態をご紹介します。

堂籠 博

救急部副部長



(写真1) 石巻赤十字病院



(写真2) 救護所での活動。
鹿児島赤十字チームとの
共同作業

今回、東日本大震災にて鹿児島大学病院の医療支援チームとして被災地の救援活動に従事してきました。それぞれの職域からのメンバーでチームを構成し、協力しあいながら石巻市にある赤十字病院を拠点として活動しました(写真1)。

私は第一陣として支援活動に参加しましたが、他の6名のメンバーとともに、現地では病院内業務の医療支援と巡回診療に従事しました。

今回の医療支援では、他施設等との協力体制も重要だと改めて感じました。写真2は巡回診療にて、鹿児島赤十字病院の方々とともに活動しているところです。この時には彼らからは種々の貴重なアドバイス等いただき、円滑に診療を進めることができました。

このように他施設との連携の重要性を十分感じましたが、同時に事前の準備の重要性と、災害医療体制の充実の重要性を感じさせられる派遣でした。日本は地震、台風の災害が多い国です。鹿児島県にも活動している火山もあり、また、毎年台風をはじめとする風雨災害に見舞われます。当院も、今後起こりえる災害と、毎年繰り返される鹿児島特有の災害に対しても何らかの対応がさらに可能なように、さらなる事前の準備・整備が必要と感じました。

最後になりましたが、被災された多くの方々にお見舞い申し上げますとともに、お亡くなりになられた方々のご冥福をお祈り致します。

内山 美香

集中治療部副看護師長
救急看護認定看護師



3月25日から29日まで医療支援チームの一員として活動させていただきました。石巻赤十字病院を拠点とし、全国から支援に来ている他のチームと協力し避難所の巡回や病院の救急外来の援助などを行いました。避難所ではエコノミークラス症候群の予防法の説明なども行いましたが、その際避難されている方々のお話を聞くと「物資は足りているよ」と言われるのですが、手足を触ってみるとこわばって冷たく、震災から2週間たっても電気や水道が復旧していない避難所では十分な休息がとれていないであろうことがうかがえました。また震災で負傷した後、破傷風を発症し人工呼吸器などの治療が必要になった方がヘリコプターで東京や埼玉の病院に転院する際の付き添いも行いました。家族と離れて患者さん一人だけが遠方に転院するため、患者さんの容体に加えて転院先と家族が確実に連絡をとれるように注意しました。

今回私は現地で活動する貴重な機会をいただきました。今後も鹿児島大学病院は支援を継続する予定ですので、できる限りお手伝いしていきたいと思っております。

松元 一明

薬剤部医療品情報主任



医療支援の中で薬剤師は、以下のような活動を行いました。

①お薬相談への対応・お薬説明

津波で薬が流されていつも飲んでた薬が分からない、という方に多く出会いました。私たち薬剤師は、被災者の方からの「高血圧の薬」、「喘息の薬」、というお話から、1日何回使用？、色は？、形は？、と更に情報を引き出したり、時には持ち込んだ薬の写真を使用したりして、以前服用されていた薬を推定しました。この時、感じたのがお薬手帳の重要性です。きちんと記録されたお薬手帳が残っていると、使用中の薬がすぐに分かりました。

また、被災者の方は特殊な環境の中、過度のストレスにさらされており、お薬を正しく使用できていない方も多く見受けられました。効果や副作用、使用方法を説明し、薬を継続して使用することの重要性を繰り返し説明しました。

②医師への処方提案

使用している薬が分かっていても、被災地で使用できる薬は限られており、全く同じ薬がない場合、それに代わる薬を医師に提案するなどしました。

③被災地の薬剤師支援

被災地の薬剤師は自身の被災や日々の激務で疲弊していましたので、石巻赤十字病院で他の施設の薬剤師と一緒に病院の業務を支援しました。

以上のような活動が少しでも被災地の方々や医療関係者のお役に立てておればと思います。

東日本大震災被災地への医療支援派遣報告会を開催

鹿児島大学病院では、5月24日、東日本大震災被災地への医療支援派遣報告会を開催し、教職員並びに学生約300名が参加しました。

本院では被災地への医療支援として、宮城県から文部科学省に派遣要請があり、同省から各国立大学病院に協力依頼がなされたことを受け、3月25日から5月1日までの間、医師3名、看護師2名、薬剤師1名及び事務職員2名からなる医療支援チーム、計12チーム(延94名)を4泊5日の日程で派遣し、石巻赤十字病院を拠点に避難所における住民の診療・健康相談活動等を行いました。

この他、4月15日から19日までの間、岩手県陸前高田市に小児外科医師1名を派遣、5月4日から10日までの間、診療放射線技師1名を福島県相馬市に遺体検案前の放射線サーベイ要員として派遣、更に精神科の医師を5月6日から8月までの予定で、こころのケアチームのメンバーとして宮城県女川町に派遣中です。

今回の報告会は、このような医療支援を行った派遣者の被災地での体験や感想を広く教職員並びに学生に聞いてもらうことを目的に企画されました。

報告会では、熊本一朗病院長から挨拶があり医療支援派遣の経緯・概要説明の後、災害派遣医療チーム(DMAT)の

リーダーで先陣をきって被災地で活動した堂籠博救急部副部長をはじめとする医師、看護師、薬剤師及び事務職員の各職種から報告が行われ、ヘリによる患者の広域搬送、避難所での診療等の現地での活動状況の他、「現場は、情報が混乱しており、どこに情報を送るかが重要」、「派遣スタッフのメンタルケアとして、任務を完了して帰った際に区切りをつけるために心の整理をする必要がある」、「日々状況が変わるので、アセスメントして対応策を立てるが、それを伝達する重要性和難しさを感じた」、「時期による医療の変化に対応するため全体を眺めるコントロールタワーが必要」などといった今後の医療支援の在り方についての課題などが報告されました。

最後に、中川昌之副病院長から、今後も何らかのかたちで支援していくとの挨拶がありました。



会場の様子

先天性心臓病(こどもの心臓病)の手術が 鹿児島で受けられるようになりました!

心臓血管外科

先天性心臓病の手術が鹿児島で本格的に始まりました。これらの特徴として、①対象が小さい、②生まれてすぐの赤ん坊や未熟児など、重症かつ緊急性の高い症例が含まれる、③病気の種類が多く専門的な深い知識と技術が必要、④1回の手術で治すのではなく計画的に手術を重ねることが必要な場合がある(段階的手術)、などが挙げられます。大学病院内のみならず学外の施設も含めて多くの専門スタッフの協力が不可欠ですが、この1年間に鹿児島で行われた先天性心臓病手術は50例ほどに上り現在ますます増加傾向にあります。年齢的には1歳未満が過半数を占め、新生児(生後28日未満)の手術も5例行われました。これまでは遠く県外の病院で手術を受けていた患者さん・ご家族にとって時間的、経済的、精神的負担が大きく軽減されます。また循環器疾患の治療体制としても完結するため、この分野を志す多くの若い医師の参加を期待しています。



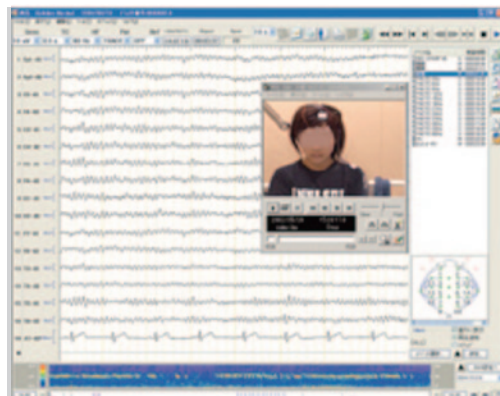
発作時の症状と脳波を同時に記録し、 より確実な難治性てんかんの診断・治療を行う

脳神経外科

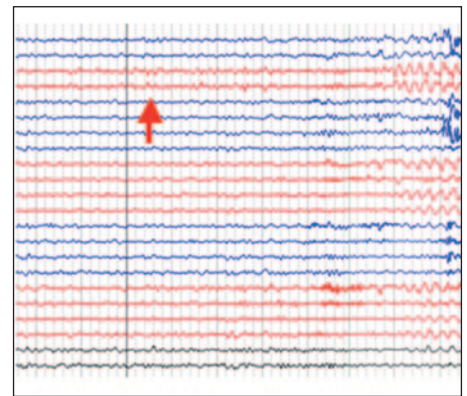
てんかんの発作が難治性に繰り返す場合、数日にわたって発作が生じている時の症状と脳波を記録して、診断や治療方針を確認することがあります。鹿児島大学病院に、この検査に必要な装置(長時間ビデオ脳波同時記録装置)が導入されました。脳の中で「てんかん発作が始まる部分」があきらかなてんかんに対して、外科手術は非常に有効です。そこで、長時間の発作時脳波記録によって「てんかん発作が始まる部分」を調べ、外科手術を行うことができるかを判断していきます。

急に倒れる発作のように「てんかん発作が始まる部分」がはっきりしない場合や、取り除くことができない部分に「てんかん発作が始まる部分」がある場合もあります。この場合でも、長時間の発作時脳波記録により発作のタイプを確実に診断した上で、急に倒れる症状を抑える手術や、迷走神経を刺激して発作を減らす手術によって、症状を軽くすることが可能です。

脳神経外科では、難治性てんかんの外科治療に積極的に取り組んでいます。こうした検査や治療について詳しくお知りになりたい方は、脳神経外科にご相談下さい。



長時間ビデオ脳波同時記録装置



難治性側頭葉てんかんの「発作が始まる部分」

引き下がらないライバル

桜島の南に浮かぶ沖小島の浅瀬。春にはうっそうと生い茂っていた海藻も、ちぎれて根元だけを残しています。日差しを遮るものが無くなり、海底には夏の日差しが照りつけています。点々と残った海藻の切れ端に身を隠しながら、一匹の魚が移動していきます。15cmほどの全身茶色の地味な魚、オハグロベラです。海藻が茂っていたときは、海藻の周りをすいすいと泳ぎ回っていましたが、身を隠す海藻が無くなり、動作もどこか不安げです。私はそんな彼を撮影しようと、先回りして彼が近づくの待ちました。臆病な彼を驚かせないよう息を殺して海底に伏せて……。

彼がカメラの目の前にやってきた時、一瞬彼は驚いたように止まりました。私に気付いて一目散に逃げているのかと思えば、次に彼がとった行動は、予想もしないことでした。地味だった彼の身体には、突如、極彩色の模様が浮き上がり、鰓蓋をふくらませてカメラに突進してきたではありませんか。その迫力に、私は驚いて思わず後ずさりしてしまいました。どうやら、カメラのレンズに写った自分を、ライバルのオスと勘違いしたようです。レンズに浮かび上がる、決して引き下がらないライバルに対して、彼は何度も体当たりを繰り返しました。そこには、先ほどまでの海藻の陰を渡り歩く、臆病そうな魚の面影はみじんもありませんでした。なわばりを守ろうとする小魚の気迫に圧倒されてしまいました。



カメラに向かって威嚇する、オハグロベラのオス

TOPICS

病院

再開発

現在の建物は築後30年以上が経過しているため、病院内施設の充実、患者さんの療養環境改善を目的に、平成19年度から建物の増築・改修を行っています。ご不便をおかけいたしますが、ご協力をお願いします。

駐車場の整備について

新病棟の工事に伴う駐車場の整備として、1階正面玄関前に新しい駐車場を造り、5月から使用を開始しています。身体の不自由な方や、妊娠されている方の専用スペースを含む110台分の駐車スペースを確保しています。病院に最も近い駐車場となりますので、是非ご利用ください。



広報誌編集部会からのお知らせ

鹿児島大学病院の診療内容、病気について的一般知識など知りたいことがありましたら、お知らせください。
また、「桜ヶ丘だより」への皆様方からのご意見・ご感想をお待ちしております。

鹿児島大学病院広報誌 桜ヶ丘だより〈22号〉

2011(平成23)年7月発行

発行/鹿児島大学医学部・歯学部附属病院広報委員会広報誌編集部会

〒890-8520 鹿児島市桜ヶ丘8丁目35番1号 TEL 099-275-6692

【鹿児島大学病院ホームページアドレス】

<http://com4.kufm.kagoshima-u.ac.jp/>